

【これらの骨は生き返る事ができようか？】

今日の聖書本文;エゼキエル書37:1-14・暗唱聖句:エゼキエル書37章14節

説教者:鄭南哲 牧師
(Rev.Jung nam-chul)

<神の預言者エゼキエル>

エゼキエルはエホヤキン王と一緒にバビロンに捕虜として連れられて行った祭司です。(第二列王24:12-16,エゼキエル1:1-3)彼は捕虜として‘ケバル’川にあるテル・アビブ(エゼキエル3:15,詩篇137:1)で住みました。テル・アビブはいまのイスラエルのテルアビブです。彼はここで捕囚として住んでいる人たちと一緒に過ごしている預言者であり、祭司でした。

エゼキエルが活動していた当時の代表的預言者はエレミヤ、エゼキエル、ダニエルおもにこの3人でしたが、エレミヤはエルサレム本土に残って預言の働きをしてエジプトに連れられて殉教されたように見られます。エゼキエルは捕虜としてイスラエルの捕虜たちと一緒に過ごしながらかつて預言し、エゼキエルの後に出るダニエルはバビロンの王室で活動していた預言者でした。エレミヤはエゼキエルより34歳ほど多い預言者であつて、ダニエルはエゼキエルより8年ほど前からすでにバビロンに連れられてきましたが、バビロンで大いに用いられる者になっていました。エゼキエルもダニエルについて言及(げんきゆう)していることを考えるとダニエルをすでに知っていたようです。(エゼキエル14:14,28:3)エゼキエルが預言の活動をし始めたのは捕虜として行って5年ほど経ってからでした。(エゼキエル1:2)この時が紀元前593年でした。これから彼は22年間預言者として働きました。

ここで、我々はそれぞれ与えられた環境と使命が違う事がわかります。我々もみな違います。ですから比較しあつてはいけません。同じく神様の預言者なのに、だれかは捕虜生活をしていて、だれかは宮殿で大いに用いられることに対してエゼキエルもひがんで、神様に不満をいだいたかも知れません。しかし、彼は自分とほかの人と比較しませんでした。我々も他人と比較する思いや言葉や行動をやめた時にこそ人生の不平と不満が減ると信じます。

<エゼキエル書の内容>

エゼキエル書は全部で48章で構成されていて、神様からいただいた黙示が記録されています。1章1節を見て下さい。“第三十年の第四の月の五日、私がケバル川のほとりで、捕囚の民とともにいたとき、天が開け、私は神々しい幻を見た。”第三十年と言う年数ははっきりした意味は分かりませんが、おそらくエゼキエルの年ではないかと思われまふ。そして“天が開け神々しい幻を見た(visions of God)”と書かれています。神様が天の‘幻を’見せて下さったという意味です。エゼキエル書は新約のヨハネの黙示録と同じく幻と黙示の書です。多くの象徴が含まれています。ですから、当然理解しがたいです。しかし、このエゼキエル書は神様から頂いた預言だと何度も強調されています。2章1節にも,”その方は私に仰せられた…”と書かれ、3章1節にも同じ御言葉が書かれています。もしくは,”次のような主のことばが私にあつた。”と書かれています。6章1節とか、7章1節、そして 12,13,16,17章などのすべての章が神様が仰せられた内容だと記されています。

エゼキエルが預言者として活動し始めたときはエルサレムが敗亡する前です。彼がエホヤキン王と捕虜として連れられて行った頃はまだエルサレムは滅びませんでした。それで1-24章まではユダに下る裁きを預言し、25-32章までは回りの国(アンモン、モアブ、エドム、ペリシテ、シドン、エジプト)に対する裁きを預言しました。しかし、33章以後からはイスラエルとユダに対する回復について語っています。今日我々が読んだ本文が含まれている37章は回復に対する代表的な本文です。

<これらの骨が生き返る事が出来ようか?>

今日の本文では明確にイスラエルとユダの回復を示してくれました。神様がエゼキエルをある谷間に連れて行かれました。そこには人の骨がたくさんありましたが、2節によると、“ひどく干からびていた”と書かれています。それは人が相当の前から死んでいたという意味です。神様はエゼキエルに聞きます。“これらの骨は生き返る事ができようか?”これは干からびた骨が決して生き返ることはできないという絶望的な状況を暗示します。人間の目では決してかなえられない不可能なことである事を反対語的に強調しています。つまり、こんなに干からびている骨が生き返る事ができるのかという質問です。エゼキエルは“主であるあなただけがご存知です。”と答えました。人間的には不可能なことだが、主が望んでおられるならできるということを暗黙的に答えたのです。神様はエゼキエルにこの骨に預言して言えと仰せられました。“干からびた骨よ。主のことばを聞け。神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。わたしがおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちの中に息を与え、おまえたちはわたしが主である事を知ろう。”

それでエゼキエルは仰せられた通りに預言しました。すると大きなどろきの音がして、骨と骨とがお互いにつながりました。そのうえに筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおいました。7節の“骨と骨とが互いにつながった。”という御言葉はそれぞれの位置をさがしてつながり、骨格を作ったという意味です。しかし、まだそこには息がありませんでした。すると神様は仰せられます。“息よ。四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹き付けて、彼らを生き返らせよ。”と仰せられたとき、彼らは生き返って、自分の足で立ち上がり、非常に多くの集団になりました。これがエゼキエルが見た幻でした。そして、墓から彼らを生き返らせてイスラエルの地に戻るようになることを預言されました。これがエゼキエル37章の始めの内容です。神様がエゼキエルに見せてくださったこの幻をとおして何を言われようとしたのでしょうか?

一つは、これはイスラエルの回復と帰還を示してくれます。

37章の内容はイスラエルの民がバビロンに捕虜として来て10年経った頃の預言です。このとき、イスラエルの民は希望が消え、挫折していました。生きる望みがない干からびた骨のような状態でした。このような状況で与えられた干からびた骨の幻は捕虜となっていた者たちには大きな慰めでした。イスラエルは自分たちの罪によってみな死にました。自分たちの中からはなんの希望も見いだす事が出来ませんでした。しかし、神様の御力によって彼らが生き返る事ができることを示して下さいました。つまりイスラエルの回復を示してくださったのです。干からびた骨のような破滅から神様は彼らを生き返らせ、彼らの地に戻らせることを教えてくださったのです。そして民族の統一をも示して下さいました。(エゼキエル37:15-23)。

つまり、民とエルサレムの城と礼拝を回復させ、その地を回復させる神様を表して下さいます。預言者たちの予言はいつも4つの側面を持ちます。一つ目は預言者が住んでいる当代の課題を預言するということです。二つ目は捕虜と帰還を語り、三つ目はメシアを預言し、四つ目は永遠の神様の国、つまり新しい天と新しい地を預言したということです。エゼキエルが見た回復の幻は究極的に永遠の国に対する預言でした。

二つは、神様の変わらない統治を表します。昔もいまも変わらず治めておられる神様を啓示しています。旧約時代の人々は神々はその土地に縛られているという世界観を持っていました。カナンにはカナンの神々がいるし、モアブの地にはモアブの神々がいる、アンモンにはアンモンの神々がいると思っていました。そしてバビロンにはバビロンの神々がいると信じていました。それでカナンの地に住んでいるとその地の神々を拝まないといけないという認識を持っていました。旧約の始めから聞いてきている内容ですが、イスラエルの民が出エジプトしてカナンの地に入って住む時なぜ、神様はカナンの神々に仕えないで神様だけに仕えようと命じられたのでしょうか？ 当時の人々はその地にはその地の神がいると思っていたので、カナンに行けばカナンの神々に仕えなければならない考えを持つ危険がありました。そういうわけでカナンの地に入っても神様だけに仕えるようにと教えたのです。

創世記12章1節によると神様はアブラハムに、“あなたは、あなたの生まれた故郷、あなたの父の家を出て”と命じられましたが、神様はその地の神々に仕えていたアブラハムをその地から呼び出された事を意味します。アブラハムが良くした事は神様の召しを受けて大胆にその地の神々を捨てて神様の導きに従ったのです。

ところが、いまユダの民はバビロンに捕虜として来ています。バビロンにはバビロンの人々が仕える神々がありました。我々が来ているこのバビロンの地においても神様はまだ我々の神であられるのか疑っていたかもしれません。彼らに神様の宇宙的主権を教え、いまも神様がその真ん中におられることを悟らせる必要があったのです。そういうわけで、どこに行っても神様の主権のもとにある事を言いながら、ユダに対する裁きと異邦の国に対する裁きを預言したのです。そして“主は仰せられた。”もしくは“主のことばが私にあった”と言いながら、バビロンにあるあなたがたにも変わらず、神様は主であることを悟らせています。

特にさきほど読んだ本文の最後である14節によると、“わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入ると、あなたがたは生き返る。わたしは、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる。”と言いながら約束を成し遂げていく方である事を示してくれます。

三つ目、ユダの民族の試練と苦しみ、そして回復の預言をとおして何かを教えようとする意図があることが分ります。先ほど読んだ本文には干からびている骨の幻が書かれています。ところが6節によると、“おまえたちの中に息を与え、おまえたちが生き返る時”と言われた後、このように言います。“（これをとおして）おまえたちはわたしが主である事を知ろう”そして13節にも死んだ者を生き返らせるという回復のことばをくださった後、“あなたがたはわたしが主である事を知ろう”と言われました。“わたしが主である事を知ろう”ということばが6章から39章の間だけで30回も繰り返されます。“あなたがたはわたしが主である事を知ろう”という御言葉と似ている箇所がエゼキエル書で65回も出ています。これをとおしてこの干からびている骨の幻を通して何かがあることが分ります。それは何ですか？ 神様の力、神様の統治、神様の導き、神様の主権をとおして神様はいまも我々とともにおられるという神様の存在を教えてください。エゼキエル書全体を通して教えてくれる一番大切な一つはこの神様の臨在です。時間と空間を越えて、移り変わりなく、その御民とともにおられる神様!を表してくれます。

<今日のための教訓>

我々はバビロンの捕虜ではありません。しかし、我々にも耐え難い現実があるときも、干からびた骨のような不可能な現実が我々を落胆させる時もあります。我々は捕虜として連れられて行った民ではありませんが、我々にも捕虜と似たような痛みや悲しみがあり、絶望や暗いトンネルのような現実があるかもしれません。一寸先も見えない絶望的な現実があり、闇のような状況に置かれる場合もあります。こんな我々にエゼキエル書は希望の神様を提示してくれます。彼は我々の望みであるキリストを提示し、キリストと彼によって成し遂げられる新しい天と新しい地を表してくれます。そういうわけで、エゼキエル書の預言はいまの暗い現実を打ち勝たせる一筋(ひとすじ)望みの光です。エゼキエル書は我々はどこにいても我々を治めてくださる神様を示して下さいます。絶望の中にいる我々に希望を与えてくださる方が神様である事を表してくれます。時には絶望し、時には挫折しますが、神様は我々の望みの神様です。(神の御言葉による魂の救いと回復・戦後70周年を向かえたこの日本の地が神による日本の回復と魂の救いの待ち望みましよう。)干からびた骨でさえ生き返らせる望みの神様がクリスチャンプレイズチャーチの一人一人の魂と心と体を生き返らせ、天の望みと恵みで満たして下さいますよう主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!